## 特集はこまち対談

## Part 9

## 映画とまちづくり

西堀 滋樹(にしぼり しげき)氏

**(PROFILE)** 



1949年 函館市末広町生まれ。明治大学政経学部卒業。東京時代、函館西高同期の佐藤泰志らと同人誌『黙示』を発行。現在は函館市立弥生小学校で事務職員として勤務するかたわら、『佐藤泰志追想集』・同人誌『路上』(現在11号まで発行)・はこだてルネサンスの会発行の『函館文学散歩』などの編集に携わる。また、これまで北海道新聞「みなみ風」のコラム欄『立待岬』に過去10年執筆したものをまとめたエッセイ集『わが世代』『路上にて』を発行している。現在は映画『海炭市叙景』製作実行委員会事務局長としてその活動に追われている。

函館出身の作家、佐藤泰志の作品『海炭市 叙景』の映画化が、市民の力により進んでいま す。今回は、その活動や作品に対する思いなどを、 映画『海炭市叙景』製作実行委員会の西堀滋樹 さんにお聞きしました。

丸藤:まず、小説「海炭市叙景」について教えてください。

西堀:佐藤泰志は41歳で自ら命を絶ってしまうのですが、81年(32歳)の一年間は、函館に戻っていました。街がテーマの作品を残したかった彼は、函館の街をかなり詳細に観察します。街の名前こそ違いますが、当時の函館の様子や人々の姿がかなり色濃く描かれている18編の小さな章が集まっての作品となっています。

丸藤:西高で同期だったと聞きました。

西堀:一時期、一緒に同人誌を出していたこともありました。ケンカ別れみたいになったのですが、亡くなったことを新聞で知った時は凄いショックでした。彼の思いというのを別な形であれ表現しなければならな

い、消してしまってはいけないという強い 危機感が湧き上がりました。そこで大きく 二つのことをしました。

ひとつは、その頃できた函館市文学館内に 佐藤泰志のコーナーをつくること。ふたつ めは、年譜や目録も載せた追悼集を出版す ることです。

丸藤:どちらも成果がありましたね。

西堀:芥川賞に5回もノミネートされている こともあり、文学館さんも好意的に取り上 げてくれました。高專寺赫が描いた初版本 の表紙の絵も掛けられています。追想集は とても話題になり、色々な層の人から欲し いと希望がありました。

丸藤:作品自体の評価も高くなってきました。 西堀:評論家の川本三郎さんやフリーライター の岡崎武志さんをはじめ、多くのかたが彼 の作品を高く評価しています。若い人から は、希望もあるけど社会への不安や憤りが 表現されていて今に通じるという話も聞き ましたし、街やそこに生きる人の視点から も見ることができるとか、心のどこかにひっかかる、という言葉もいただきました。噂が 噂を呼んで、古本市場では「佐藤泰志とは何者だ」となり、高値にもなったんですよ。

丸藤:2007年には、素晴らしい作品集が出版されましたね。

西堀:クレインという出版社の文弘樹さんが 立派な本にしてくれました。出版 1 周年記 念に行ったシンポジウムには、いつもの文 学の集まりでは見かけないような若い人が 多く来てくれました。

丸藤:映画化に向けての動きは、どのように 始まったのですか?

西堀: そのシンポジウムの席にシネマアイリスの菅原和博さんが来ていて、映画にしたいという相談を受けました。

丸藤: それを聞いてどう思いましたか?

西堀:本と違って映画はお金の単位が全然違うので、すぐに「はい」とは言えませんでした。11月に相談を受けて、年明けまでけっこう悩みましたね。でも、やらなきゃ何も生まれないなと。リスクもあるけど踏み出さなきゃ動かないということで、今年が退職の年だということも忘れてしまい(笑)始めました。

丸藤:実行委員会には、いろんな方が集まりましたね。

西堀:小説が好きで入った人の他、映画作りに関わりたいという人も多いです。義務的なものでやっているのではなく楽しみながら一緒に創っていて、まさに"チーム海炭市叙景"です。

丸藤: すでに先行ロケが済んでいるゴライア スクレーンのシーンは、今年でなくては撮 影できませんでした。

西堀:タイミングですよね。色んな課題はあったのですが、今が時だという時があるんですね。 映画って一年以上の長いスパンが必要で、皆さんの目に見えるのは時々でも実行委員はその間にかけずり回っているんですよ(笑)

丸藤:監督は、今とても活躍している熊切和嘉

さんです。

西堀:熊切監督も単なる観光映画にしたくないと言いきってくれています。生活する場から街を見るということが色濃く出るかもしれません。地元の人間としては、期待感とちょっとした怖さもあってワクワクしています。それと、今というのは今しかありません。本当は残しておきたいものを、せめて映像の中で残しておきたいと思っています。

丸藤:募金も集めていますね。

西堀:映画制作協力金(1口1万円)やサポーター募金(1口3千円)などがあり、金額に応じて映画のチケットやエキストラの参加、エンドロールへの名前記載など特典もあります。お陰様で、全国から多くのリアクションをいただいています。お金をいただくわけですから期待に応えられるよう頑張っています。

丸藤:来年の2月には、いよいよ本格的な撮影 が始まります。

西堀:撮影が来年の2月で、公開は秋頃になる 予定です。映画創りにはまだまだひと山もふ た山もあると思いますが、色んな形で参加し ているという喜びを共有しながら、たどり着 いていきたいと思います。みんなが参加する ということを大切にしたいので、ぜひとも、 自分も映画のサポーターということを感じて もらいたいですね。エンドロールが流れ自分 の名前を見つけて、「ああ!」と喜びたいと いう思いでいっぱいです。(笑)

丸藤:市民映画、ですね。

西堀:はい。それと、映画とともに佐藤泰志の ことも知ってもらいたし、本も読んでもらいた いです。思い当たる人や景色というのが、きっ とありますから。

〈聞き手〉

函館市地域交流まちづくりセンター

センター長

## 丸藤 競

